

本能寺跡出土の瓦

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 天正10年(1582)6月2日早朝、織田信長は明智光秀の謀反により本能寺で49歳の生涯を閉じます。本能寺の変の舞台となった本能寺跡は、現在の西洞院通と蛸薬師通の交差点北西側にあります。これまでに旧境内では4回の発掘調査が行われており、代表的な出土遺物は令和元年度に「本能寺跡出土品」として京都市の有形文化財に指定されました。今回は本能寺跡出土の瓦を紹介します。

載輪宝鬼瓦(写真1) 本能寺跡出土の瓦として最も知られている遺物です。角や牙の先端が折損していますが、ほぼ完形で、ぎょろりとした目や大きな鼻、むき出した前歯など迫力がある容姿です。さらに大きな特徴は額に戴いた輪宝です。輪宝とは元は古代インドの武器でしたが、仏教に取り入



写真1 載輪宝鬼瓦

れられて悪を払う象徴となりました。鬼瓦は魔除けのために屋根に飾られたものですが、この鬼瓦は

さらにグレードアップしています。

俱利伽羅剣文鬼瓦(写真2) 十分に満たない破片ですが、剣に巻き付く龍を浮き彫りにしています。龍は胴を躍動的にくねらせ、脚は鋭い三本爪です。また、鱗は竹管を押し当てて表現しています。製作した工人の技量をうかがうことができ、失われた頭部はきっと精悍な表情だったことでしょう。この文様は俱利伽羅剣文と呼ばれ、不動明王が持つ剣と同じモチーフで、魔を打ち倒す智慧を象徴しています。

これらの鬼瓦の使用例をうかが



写真3 本通寺本堂の屋根



写真2 俱利伽羅刻文鬼瓦

い知ることができる建物があります。岡山県瀬戸内市牛窓町にある法華宗寺院の本蓮寺本堂の屋根には載輪宝鬼瓦が飾られています(写真3)。本蓮寺本堂は明応元年(1492)年に建造されており、天文14年(1545)頃に再建された本能寺よりも古い、西日本最古の法華宗寺院の建物で、国の重要文化財に指定されています。屋根には輪宝のほか密教の法具・桃・「王」字銘など個性的な魔除けのモチーフを戴いた鬼瓦が飾られており、往時の本能寺の建物を想像することができます。

「触」字銘軒丸瓦(写真4) 本

能寺の寺号の「触」の字を中心に飾り、周囲には圏線と珠文が巡ります。「触」の字は当用漢字の字体ではなく異体字の「触」を使用しています。現在も寺号には「触」の字が用いられていますが、これには俗説があります。すなわち、本能寺の変で焼失したので「火」に音が通じる「ヒヒ」のつくりを避け、「去」に近いつくりを使用したと。しかしながら、本能寺の変で被災した建物に「触」字銘の瓦が使用されていたことから、この



写真4 「触」字銘軒丸瓦

俗説は成立しなくなりました。「触」字銘は鬼瓦の上に取り付く鳥袋トリフクロにも使用されています。

焼けた瓦(写真5) 室町時代の瓦は、焼成段階で燻スモウ焼きにすることで炭素を吸着させるため、表

面は灰色から黒色に仕上がります。載輪宝鬼瓦のように丁寧にみがいて仕上げる¹と表面は黒光りします。ところが本能寺跡出土の瓦には、表面が白色・淡橙色・橙色に変色した瓦が多く含まれており、中にはまだらに変色している瓦もあります。火災による熱を受けて変色したと考えられ、これらはまさしく本能寺の変で焼けた瓦です。

焼けた壁土(写真6) 焼けて橙色に変色した土の塊が出土しています。5~10cmほどの大きさに砕けており、スサに使用した稲ワラを含んでいることから、建物の壁土あるいは屋根瓦を固定する葺土フキどの破片と考えています。本能寺の変で被災した建物の残骸の一部で、激烈な火災の様子をうかがうことができます。

おわりに これらの瓦は、境内に掘った穴や東側の大きな堀に埋め立てられていました。本能寺の変の後、跡地は片付けられて建物が再建されることはありませんでした。稀代の英雄と運命を共にした瓦に、在りし日の本能寺を偲んでいただければ幸いです。

(山本雅和)



写真5 焼けた瓦



写真6 焼けた壁土